



No. 158

ティークレイク

Tea Break

盲亀の浮木

会員 若林 擴

滅多にないことの譬えに、「盲亀の浮木 (モウキのフボク)」「優曇華の花 (ウドンゲのハナ)」という言い方がある。

「盲亀の浮木」は、百年に一度海面に浮上する目の見えない亀が、たまたまそこに漂っていた流木の穴に頭を入れたという、「般若経」に出てくる仏教の教えの話から、非常にまれなことの譬えである。

「優曇華の花」は、三千年に一度花が咲くといわれることから仏教で極めて稀なことに会うことの譬えであり、「盲亀の浮木、優曇華の花」と繋いだセリフは、昔、歌舞伎や講談や落語の中の奇跡的な出会いの枕によく使われている。

いずれにしても偶然が極まった時のことであり、誰でも人生に一度や二度は経験したことがあるでしょう。

私にとって「盲亀の浮木」、「優曇華の花」の奇跡的な出会いにこんな事があった。

「盲亀の浮木」は、フジテレビの露木アナウンサー司会、大島渚映画監督コメンテーターの「スーパー・テレビ・スペシャル」、「不思議の国・ニッポン」「掘り出し物フィルム」のテレビ特番を偶然に見た時の事である。

昔、映画館に行くと映画上映の前に、必ず、アメリカのムービートーン・ニュース社の「世界の出来事」を伝えるニュース映画が上映されていた。

番組中、そのアメリカのムービートーン・ニュース社取材の昭和10年(1935年)のニュース映画が放映され、タイトルに「GREAT INVENTOR TESTS HIS RUBBER SUIT」「発明王の公開実験—安全水上歩行用スーツ」「発明王 若林氏」と父の特集のクレジットが出た。

父だ！ 食事の最中、びっくり仰天した私の口から食べ物が飛び出した。私は昭和9年に生まれたので、この瞬間に、その翌年の若き父の映像を見た。父が発明した

「安全水上歩行用スーツ」を自ら着用して、公開実験を行っている姿は、今まで私が見たことも聞いたこともなかった動画であった。涙がどっと溢れた。

「フィルムに登場する人物に心当たりのある方はご一報下さい」とアナウンスがあったので、直ちにフジテレビに電話した。画面に現れたのは正しく私の父であり、私は現在、弁理士であり、昭和34年(1959年)より、若林国際特許事務所を経営していることを説明した。

何たる偶然、とフジテレビも十分納得して、早速ダビングしたビデオを送って呉れた。念のため我が家の倉庫も探したら、当時のムービートーン・ニュース社から頂いた35ミリフィルムが詰まった大口径の丸いフィルム缶が出て来た。35ミリフィルムの映写機がないので全巻は未だに見ていない。

ホラー映画専門の、特殊メイク・特殊撮影の映画製作会社を営んでいる長男に、祖父の唯一の動画の思い出として、このフィルム缶を保存するように渡してある。

「優曇華の花」は、平成19年(2007年)2月12日、月曜日、白内障の手術を終わって、初めて眼帯を外した朝、産経新聞の朝刊を、いつも最後の頁から見る癖があるのを、たまたま真ん中から開いた。1頁の上半分の文化欄に「ニッポン残像」と題した記事があり、「自立促した発明家」というタイトルが目飛び込んだ。写真家・菌部澄が、師匠・木村伊兵衛の下で修業中に撮影した一コマの「浅草公園戦災給食所」昭和23年2月の写真と記事が目に入った。

父だ、手術が成功してすべての物が鮮明に見えるようになった目から新鮮な涙が溢った。

そこには次のような記事と写真があった。

「衣食住がすべて不自由だった終戦後、混乱とインフレのなか(配給切符)もあてにならず、お金があっても

店頭に物が無い。各家庭では、農家に着物などを持参して米や野菜に替えるなど、食糧確保が大問題だった。」

「日本が（1945年）昭和20年8月14日ボツダム宣言を受諾し、15日に連合国側に無条件降伏した終戦の翌年、上野から浅草にかけて3月10日未明の下町大空襲で焼夷弾により、上野駅から隅田川まで焼野原になり、遮るものもなく一望出来るようになっていた茶色い焼けトタン屋根の平屋のバラックの群れの浅草公園六区に、当時向島に石鹼工場を経営していた若林氏は、逸早く3階建ての白亜のビルを建設した。」

「昭和21年10月、ビルの1階に（浅草公園戦災給食所）を開設し、1杯5円で（混菜丼）が食べられるようにした。復員兵風や会社員風の客が、帽子をかぶったままで立ち食いしていた。」

「写真奥で机に向かうのが、同給食所を開いた若林茂氏。発明家の若林氏は、当時貴重な石鹼の製造で儲かっていた、東京・向島の石鹼工場を閉鎖して、浮浪者の無

料宿泊所を設けるなどの社会事業を行った。（注、当時戦災で焼け出されて家を失った戦争被災者は浮浪者と呼ばれ、住所が無いので食券や食料の配給を受けることが出来なかった。仏門の出の父はこれを見るに見かねて、当時経営していた向島の石鹼工場を開放し、浮浪者と呼ばれた戦争被災者に無料で住所を与え、食券や食料の配給を受けられるようにした。）」

自身の発案による、割れコンロ補強の「万年バンド」製造所を給食所上につくり、戦災浮浪者の自立を促す作業所になっていた。

壁には「俺ハ浮浪者デハナイ」とある。

この写真と記事は、「奇人・発明先生」として、グラフィック誌「週刊サンニユース」昭和23年4月25日号に掲載されている。

この父の一連の写真は終戦後の貴重な世相の写真として、半蔵門にある日本カメラ博物館に今も所蔵されている。